

## 『景德伝燈録』 訳文(二)

前の京兆けいちようの翠微すいび無学むがく禪師ぜんじの法嗣はつす

鄂州がくしゅう (湖北武昌) の清平山せいへいざんの令遵れいじゆん禪師は、東平 (山東東平県) に生まれた人であった。俗姓は王氏であった。年若くして東平の北菩提寺ほくほだいじで、唐の咸通六年 (八六六) に髪を落として出家した。後に (年至つて)、滑州かつしゅう (河南滑県) の開元寺に行つて具足戒ぐそくかいを受け、律学を学んだ。

ある朝、仲間の修行僧に、「沙門しゃもんたるものは、生死を究め尽くして、仏法の道理に深く通じなければならぬ。それなのに、もし経論の巻き物を繕ひもとき、一つひとつの経文きやうもんのことばに苦しみながら、経論の文意や言葉の解釈ばかり求めていくならば、海辺の砂粒をみな数え尽くそうとする

『景德伝燈録』 訳文(二) (鈴木)

鈴木 哲 雄

ように、ひとかけらの心を煩わすだけに過ぎない」と言われた。

とうとう、律学の勉強をやめて、遠く参禅の会座えざを尋ねられ、江陵かうりやう (湖北江陵) の白馬寺 (江陵県城東八〇里) に着かれた。僧堂の中で一人の高徳の老僧に出会われた。慧勤えごんという名であった。師は慧勤和尚に親しく教えを請いたいと思われた。慧勤和尚は「私は長い間丹霞和尚たんかのそば近くにお仕えをした。今はもう年をとつてしまつて、修行者の指導は無理です。お前さんは翠微和尚にお目にかかるがよからう。翠微和尚と拙僧とは、同じ丹霞和尚に参じた仲でした」と言われた。師はお礼を述べて、そこを發たれた。

『景德伝燈録』 訳文 (二) (鈴木)

師は翠微和尚の法堂はつどうの会座えざに着いて、「達磨大師がインドから中国に伝えた禅の真意は、ずばり何ですか」と尋ねた。

翠微和尚は「人がいなくなったら、お前に話そう」と言われた。

師はしばらく待って、「人がいなくなりました。どうぞお師匠様、お教え下さい」と言った。

翠微和尚は禅椅ぜんいを下りて、師を連れて、竹園に入られた。

師はまた「人がいません。どうぞお師匠様、お教え願います」と言った。

翠微和尚は竹を指差して、「この竹はどうしてこのように長く、あの竹はどうしてこのように短いのか」と言われた。

師はその言葉のかすかなところはさとったが、まだ幽玄微妙みみょうな禅旨ぜんじに徹底できなかつた。

師は文徳元年（八八八）に、上蔡じょうさい県（河南）に至った。（そこでたまたま）州の長官である將軍が仏法を重んじて、大通禅苑を創建したのに遭遇した。（長官は）師にここで

宗旨を開くようお願いした。

師は、自らみずか翠微和尚に初見された時の言葉を示して、修行僧に向かつて言われた。「先師翠微和尚は、泥水に入るようにして、私を指導してくださいました。それ以来、私は世間の（あれこれ取捨選択する）ものの道理は捨てていまず」と。

師は、その後、大通禅苑でほとんど十年にわたって教化された。

師は光化年間（八九八―九〇一）に、弟子百人余りを引き連れて鄂州がくしゅう（湖北）に遊方され、節度使の杜洪とこうの要請をうけて、清平山の安楽院に入られた。

師は法堂はつどうに上がって言われた。

「皆さん、出家者は必ず仏のみこころを会得えとくしなければなりません。もし仏のみこころを会得するならば、僧だ在家だ、男だ女だ、身分が高い低いということにはかかわりがないのです。ただ禅の指導者の活手段に参隨さんずいすることによってのみ、安心あんじんが得られます。

皆さん、皆さんは一人残らず、今まで坐禅弁道の道場に

いて、高德の老僧を尋ね、道を求められました。ちょっと、仏のみこころをどのように会得えとくされたかお聞きしたい。試しに前に出てきて一緒に検討しましょう。

今まで求め続けた、精神の高まりを無駄にははいけません。後になって、一つのことすら成し遂げられなくて、一生を虚しく過むなごしてしまふことになります。

もしまだ仏のみこころを会得していないならば、たとい頭の上に水を出し、足の下から火を出す神変を顕あらわしたり、身を焼き、肘ひじを焼いて仏に供養を示そうとしても、また、深い智慧でことば多く、弟子を一千、二千と集め、雲が湧くように自在に、雨が降るように豊かに教えを説き、天界の妙なる華が乱れ降るように説き得たとしても、ただ、邪よこしまな教えでしかない。どうして、優劣を競うことなどできましようや。真の仏法との距離は、甚だ大きいと言わざるを得ません。

皆さんは、幸いなことに、禅の教えを正しく聞くことができます。前に出てきて質問をして、少し工夫して、仏の本意を丸ごと掴つかみ取るがよい」。

『景德伝燈録』訳文(二) (鈴木)

(その誘いに乗って) ある僧が (前に出てきて) 尋ねた。  
「大乘とはどんなものですか」と。

師は「麻縄だ」と答えられた。

僧は「小乗とはどんなものですか」と尋ねた。

師は「銭差ぜにさしだ」と答えられた

(第二の質問者が) 「この清平山の禅風はいかなるものでしょうか」と尋ねる。

師は「一斗(約六リッター)の麦粉でパンを三個作る」と答えられた。

「禅とはどんなものですか」と尋ねた。

師は「猿が木に上のぼって、尻尾が幹のてっぺんに立っている」と答えられた。

「有漏うろうろ(煩惱のもと)とはどんなものですか」と尋ねた。

師は「ざるとかませがきとかだ」と答えられた。

「無漏むろう(煩惱の無いこと)とはどんなものですか」と尋ねた。

師は「木のしゃもじだ」と答えられた。

「目のあたりに、(禅そのものを)差し出した時はどうですか」と尋ねた。

師は「差し出されたものは」典座(料理主任)にわけ上げてあげます」と答えられた。

学人の問いに対する令遵禅師の接化の方便は、その場の情況に拘ることがなかった。学人の見解を否定したり、肯定したり、巻いたり伸べしたり、把住放行自由自在で、言葉は越格の力量すらも超えていた。

天祐十六年(九一九)正月二十五日午時(午後〇時前後)に入寂された。世寿は七十五歳であった。周の顕徳六年(九五九)、法喜禅師と諡され、塔は善応といった。

舒州投子山大同禅師は舒州(安徽)の懷寧県が本貫(本籍)である。俗姓は劉氏である。幼いころに洛陽(河南)市内の保唐寺の満禅師によって出家した。始めに安般観(小

乗の入出息の観法)を修めた。次に華嚴経を読んで、仏の廣大無辺の真実の世界に目を開いた。更に翠微山の法会に至って無学禅師にまみえ、その宗旨を頓悟した。「その時の言葉は翠微章に見える」。これより任運自在に遍ねく全国を遊行し、故郷の舒州に巡り戻った。(そして)投子山(安徽桐城県北二里)に隠棲し、草庵を結んで住した。

ある日、趙州從諗和尚が桐城県にやってきた。(たまたま)師も投子山を下りていた。道で出会ったがまだお互いを知らなかった。趙州和尚はこっそりと土地の確かな人に尋ねて、この人が大同禅師であると知った。

そこで(趙州和尚は)大同禅師を待ち受けて、問いかけて、「こちらは投子山のご住持ではないですか」と言った。師は「茶と塩を買う錢(生活費)を一つ下さい」と言った。

趙州和尚はすぐに先に(回って投子山の)草庵に行つて、中で座っていた。

師はやがて油壺を携えて庵に帰った。

趙州和尚は「かねてから投子和尚には一度お目にかかり

たいと願つておりましたが、ここに来てみれば、ただ油売りの年寄を見るだけです」と言った。

師は「お前さんはただ油売りの年寄を見ているだけで、投子和尚を見ていなさん」と言った。

趙州和尚は「投子和尚とはどのような和尚ですか」と聞いた。

師は「油だ油だ」と言った。

趙州和尚は「死中に活を得るとはどういうことですか」と尋ねた。

師は「夜になってからこそ行くものではない。明るくなってから行くものだ」と言った。

趙州和尚は「私がつくに侯白こうはく（という名、油売りの年寄）だと言いつつ切っているのに、彼はその上に侯黒こうくわく（という名、油だ油だ）だと言っている」と言った。

〔投子大同禪師と趙州從諗和尚の二人が互いに問答応酬したことについては、詳しくは『本集』に載っている。

そこに記されている言葉は、簡潔敏捷であり、意味の趣きは奥深く険しい。国中の禪者は、投子大同禪師と趙州從諗禪師は拔群の（禪の）はたらきを持っている、と言

っている。〕

その時以来投子大同禪師の教えは天下に聞こえ、修行を志す仲間が競って馳せ集まった。

師は大衆に言われた。「お前たちは、ここに来て目新しい語句を求め、麗うるわしい四六文しりくぶん（美文）を集めようとし、口に出しては高貴に述べるべきだ、と思っっているらしい。わしは年を取って、氣力が少し衰え、是非を議論する舌鋒も鈍くなった。お前たちかもしれわしに質問したら、そこでお前たちの質問に従って答えたとしても、幽玄微妙さについて、お前たちに及ぶべくもない。またお前たちの耳に教えないし、遂には向上行（修行）についても向下行こうげきよう（教化）についても説かない。仏があり、法があり、凡夫ぼんぷがあり、聖者があるということもまた（私のところには）ない。坐禅もお前たちの自由を束縛してしまふ。（私の宗風は）千變万化ではあるが、ざつといえは、お前たちが生半可なまに理解し、自分で（悟ったつもりとなって）背負いこみ、持ち回り、自分でやって自分で（なしたことを）受ける、ということだ。ここにはお前たちに与えることのできるもの

はない。お前たちをたぶらかしおどすようなことはしない。表もなく裏もなく説くことのできることを、いったいお前たちは知っているか」。

その時、ある僧が「表も裏も収まらない時はどうでしょうか」と尋ねた。

師は「お前はこの耳に（聞いたことに）こだわっている」と言われた。

僧が「大蔵教の教えの中には、また勝れた特別なことがありますか」と質問した。

師は「大蔵教を全部述べきってみよ」と言われた。

僧が「眼がまだ開かない時の事はいかがでしょう」と尋ねた。

師は「目は清らかで、長くて広く、（まるで仏の目の）青蓮のようだ」と言われた。

僧が「もろもろの仏ともろもろの仏が説かれる法は、す

べてこの経から出ています（といわれていますが）、この経とはどんな經典でしょうか」と問うた。

師は「この名称をお前は当然奉持すべきだ」と言われた。

僧が「（情を絶した）枯れ木の寂靜の中にも、竜吟（竜のうなり声）がありますか」と問うた。

師は「わたしは（死んでいるはずの）髑髏の中に、仏の無畏の説法があると言いたい」と述べられた。

僧が「仏の一つの説法が（雨のように）あまねく一切の生あるものを潤し救うといえます。この一法とは何ですか」と質問した。

師は「雨が降ったぞ」と言われた。

僧が「目にも見えないようなごく細かい塵一つの中に、宇宙が丸ごと収まってしまふといえます。どういうことでしょうか」と尋ねた。

師は「もう幾つかの塵（分別心、煩惱）が働いている」と言われた。

僧が「菩提涅槃ぼだいねはんという金の鎖くわ（すばらしい言葉）に縛られて、（鎖が）解けない時はどうしたらよいでしょうか」と問うた。

師は言われた「解けたぞ」。

僧が「私が修行しようとする時はどうでしょうか」と尋ねた。

師は「天空は今まで爛れ壊れることはなかった」と答えられた。

雪峯義存和尚せつほうぎそんが師の傍らに従って立っていた。師は庵の前の一つの石を指差して言われた。「過去、現在、未来の三世さんぜのもろもろの仏がみなこの石の中にいます」と。

雪峯は「この中にましまさないもののあることを知らなければなりません」と申し上げた。

それで（まあなんと）師は庵に帰って中で坐禅したのです。

ある日雪峯和尚は師に随行して、竜眠りゅうみんの庵主を訪れようとして、「竜眠へ行く道はどっちへ行けばよいのですか」と尋ねた。

師は拄杖しゅじょうで前を指された。

雪峯和尚は「東へ行くのですか、西へ行くのですか」と聞いた。

師は言われた、「何もわかつちやいない」。

雪峯和尚は別の日に又「（一槌いっつゐのもと）一言のもとで大悟する時はどうでしょうか」と尋ねた。

師は「イライラしない人だ」と言われた。

雪峯和尚は「一槌をかりない時はどうでしょうか」と尋ねた。

師は「まだそんなことを言っている」と言われた。

師がある日、庵の中で坐禅をしていた。

雪峯和尚は「和尚様、ここでは、参禅する修行者がありますか」と尋ねた。

師は、床下で鋏を取り出して、雪峯和尚の目の前に投げ

出された。

雪峯和尚は「そういうことであれば、この所を掘ってしまします」と言った。

師は「分からん奴だな、面白くない」と言われた。

雪峯和尚は別れを告げて立ち去った。

師は門に出て送り、急に声を掛けられた。「あなたさんよ」。

雪峯は振り返って「はい」と返事をした。

師は「道中、ご無事で」と告げられた。

僧が「旧い年はもう過ぎ去り、新しい年がやってきました。一体このような新旧にかかわらないものがありますかと質問した。

師は「ある」と言われた。

僧は「かかわらないものとはどのようなものですか」と尋ねた。

師は「明けましておめでとう」と言われた。

僧が「(私は今) 欠けた月のようにぼんやりしてはつき

りしません。三つ星(オリオン星、心星)のごときには天地は納まりません。和尚様、どこに向かったら明らかになるでしょうか」と問うた。

師は「何を言っているのか」と言った。

僧は「想いまするに、和尚様は満々と湛えた水に小波があつても、天に届くような大水の荒波がありません」と言った。

師は「益体もないことを言う」と言われた。

僧が「(私が和尚様と) 同じ類としてきましたら、いかがでしょうか」と尋ねた。

師は「人間の類から来たのか、馬の類から来たのか」と言われた。

僧が「仏から仏へと親しく手ずから教えを授け、祖から祖へ次々と伝えられるといいますが、どんな法を伝えるのですか」と問うた。

師は「わしは出鱈めな話は聞かない」と言われた。



僧が「私は出家しましたが、まだ仏を見ていません。どういうことでしょうか」と尋ねた。

師は「目に見えることのできるものは何もない」と言われた。

僧が「父母と分かれて仏門に入るといふことはどういうことでしょうか」と（再度）尋ねると、

師は「生まれるところはない」と言われた。

僧が「燃え盛る火の中に身を隠すといふことはどういうことでしょうか」と尋ねた。

師は「隠れるところはどこにもない」と言われた。

僧が「石炭の山の中に身を隠すといふことはどういうことでしょうか」と尋ねると、

師は「わしが言いたいのは、お前は漆うるしみたいになつて黒だといふことだ」と言われた。

僧が「ずばりと（明白でなければならぬのに）明白でない時は、いかがなものでしょうか」と問うた。

師は「明白だ」と言われた。

『景德伝燈録』訳文（二）（鈴木）

僧が「ぎりぎりの決着の一言とはどのような一言でしょうか」と尋ねた。

師は「（お前は）はじめから明らかになつていない」と言われた。

僧が「苗によって土地の善し悪しを見分け、言葉によって人となりを見別する、と言います。どうもはつきりしません、どうやって見分けるのですか」と尋ねた。

師は「（言葉を）続けるな」と言われた。

僧が「このお寺には衆僧が三百人います。数に入つていない人がいますか」と質たした。

師は「百年前、五十年後を見て取りなさい」と言われた。

師が僧に尋ねられた。「あなたは疎山寺そざんじ（江西金谿県西北五〇里）の（中で有名な）剛直な人と聞き及んでいけど、どうでしょうか」と。

僧は返事につまづいてしまった。

『景德伝燈録』 訳文 (二) (鈴木)

〔法眼が僧の返事につまんだところを代わって、「以前からずっと和尚様を尊敬しております」と言葉を着けた。〕

僧が「荒玉あらたま（磨いていない玉）を抱えて、和尚様の前に身を投げ出しています。どうぞ和尚様、玉を磨き出してください」と願った。

師は「わしは玉を磨き出すような立派な指導者ではない」と答えられた。

僧は「そうならばあの卍べんかのように、身の立つところがありません」と言った。

師は「荒玉のようなものを持ちこんでいると、（法華經に語る）おちぶれた窮子くうじのように、苦しみに遭うだけだ」と言われた。

僧は「持っていないなかったならどうなんですか」と尋ねた。師は「お前に、荒玉を抱いて指導者に身を投げ出し、その上、玉を磨くことを願うようなことはさせはしない」と述べられた。

僧が「那吒太子なたは、自分の骨を裂いて父親に返し、自分の肉を裂いて母親に返したといひます。那吒太子の本當の姿はどうなりますか」と質問した。

師は手にしていた拄杖しゅじょうを放置された。

僧が「仏法ということについて、どのように『清』と『濁』を見て取るのですか」と尋ねた。

師が「仏法は清なのか濁なのか」と反問すると、

僧は「わたし、わかりません」と答えた。

師は「お前はたった今、何を尋ねたのか」と言われた。

僧が「一様に水であるのに、どういう訳で海の水は塩辛く、河の水は味がないのですか」と問うた。

師は「天上には星があり、地上には木がある」と答えられた。

〔法眼ほうげんは師（投子）の答話の言葉とは別に、『まるつきり違っている』（一様ではない）という語を着けた。〕

僧が「祖師意そし（達磨が伝えた禅意）とはどんな意味なん

でしようか」と質問した。

師は「当来仏とらいぶつ（世尊から来世に仏となることを予言された）としての弥勒菩薩みろくも、祖師意を予言されたところについては何うかがい知れないものよ」と言われた。

僧が問うた。「和尚様、この投子山じょうしに住すまわされてよりこのかた、どのような境界きょうがいにあられますか」と。

師は「あげまきの幼女こわ（は）、髪の毛真まつ白しろ（の老婆）、というところだ」と答えられた。

僧が「無情である木や石が、仏の真理を説く、といひます。どういふことでしょうか」と尋ねた。

師は言われた。「むかつく」。

僧が「毘盧遮那びるしゃなとは何ですか」と問うた。

師は「もう名前があるじゃないか」と言われた。

僧が「毘盧遮那の師は何ですか」と問うと、

師は「まだ毘盧遮那仏が現れないところで掘ひかみなさい」と述べられた。

『景德伝燈録』 訳文（二）（鈴木）

僧が問うた、「お願いします、スケールの大きい一言をおっしゃって下さい」と。

師は「よろしい」と言われた。

僧が「病あつが篤あつく死せまが逼せまってきた時はいかなものでしょうか」と尋ねた。

師は「身心には実体がない」と言われた。

僧が「ちらっとした思いもまだ起こらない時はどうでしょうか」と質問した。

師は「本当にでたらめを言う」と言われた。

僧が問うた、「凡夫と聖者との間には、どれ程の隔へだたりがありますか」。

師は住持の禅椅ぜんい（椅子）を下おりて立たれた。

僧が問うた。「私が一問するとすぐさま和尚様は答えられます。もし千問も万問もしたら、いかがなされますか」。

師「鶏にわとりが卵を抱くようなものだ」と答えられた。

僧は「(釈尊のおっしやられた)『天上天下唯我独尊』という言葉の、『我』とは何ですか」と問うた。

師は「あのお年寄りの外国人(釈尊)を推し倒して、どんな過とががあるうぞ」と答えられた。

僧は、「和尚様の御師匠様はどんな方でしたか」と尋ねると、

師は、「御師匠様(翠微無学禅師)をお迎えしても、その首も見えませんが。御師匠様に随ってもその姿も見えませんが」と言われた。

僧が問うた。「(仏)像の製作がまだ完成しません。(仏の)身体はどこにあるのでしょうか」と。

師は、「みだりに造り上げるな」と言われた。

僧は、「像として姿をあらわしてくるかあらわしてこないとかいうことは、みだりに造り上げるなどおっしやられても、どうしようもないことです」と答えた。

師は、「どこに隠れているのか」と言われた。

僧は「(例えば無目的の人のように、或いは見る目のない人のように) 目を持っていない人は、どのように歩あゆみを進めたらよいのでしょうか」と質問した。

師は言われた、「十方どこへでも」と。

僧は、「目を持っていないのに、どうして十方どこへでも歩を進められましようぞ」と反問した。

師は、「目が着いたのか」と言われた。

僧が、「達磨大師の西来の真意は何ですか」と問うと、

師は、「畏れ憚はばからなくてよい」と答えられた。

僧が、「月がまだ満月にならない(仏性がまだ完全となつて顕現しない)時は、どうですか」と尋ねた。

師は、「二つ三つ、月を呑みこんでしまおう」と答えられた。

僧が、「満月のあとはどうでしょうか」と再問すると、

師は、「月を七つ八つ吐き出してしまおう」と答えられた。

僧が問うた、「太陽や月がまだ出ず暗い時、仏と衆生とはどこに在るのしょうか」と。

師は言われた、「わしが怒るのを見ると怒っているというし、わしが喜ぶのを見ると喜んでいう」と。

師が僧に問うた。「どこから来たか」。

僧は、「あちこちの山で祖師方にお目にかかって来ました」と答えた。

師は、「祖師はあちこちの山にはいない」と言われた。

僧は答える言葉もなかった。

〔法眼は僧に代わって、(答える言葉もなかった、というところに)「和尚様は祖師(ということ)をよく知っておられる」という言葉を着けた。〕

僧は、「仏法の眼目はどのようなのですか」と問うた。

師は、「お前の口で言うまでには、お前はまだ至っていない」と言われた。

僧が問うた、「牛頭法融祖師(牛頭宗の祖)がまだ四祖

『景德伝燈録』訳文(二)(鈴木)

にお目にかからなかった時は、どうでしたでしょうかと。

師は、「人のために利益する指導者となった」と答えられた。

僧が「四祖にお目にかかった後はどうでしたでしょうかと問うと、

師は、「人のために利益する指導者とはならなかった」と答えられた。

僧は、「もろもろの仏がこの世に現われ給うたのは、一大事因縁による(と『法華経』にある)のですが、この一大事因縁とはどういうことですか」と質問した。

師は、「尹長官がわしのために上堂説法の法席を設けてくれた」と言われた。

僧は、「仏とは何ですか」と尋ねた。

師は、「幻は追い求めてはならない」と言われた。

僧は、「私ははるばる遠くからお師匠様を尋ねて参りました。どうぞ一度私を親しく御指導下さい」と言った。

師は、「きようはわしは腰が痛い」と言われた。

野菜係の菜頭さいじゅうが方丈ほうじょうに入つて教えを請うた。

師は、「ちよつと席をはずして、人のいないのを見計らつて来なさい。貴僧のために話しましょう」と言われた。

菜頭が翌日人がいないのをうかがつて、また方丈にやつて来て、「どうぞ和尚様、お教え下さい」とねがった。

師は、「もうそつと前に来なさい」と言った。菜頭が前に進み出ると、

師は、「安易にこのことを人前で取り上げて語るなよ」と言われた。

僧が「(禅の道理は言葉を越えているといえますから、)口を閉じて道理をおっしゃって下さい」と問うた。

師は、「おまえはただわしに言えないようにしたいだけなのか」と質ただした。

僧は、「達磨大師がまだ中国に来なかつた時はどうでしたか」と問うた。

師は、「天地にいつぱいだった」と答えられた。

僧は、「中国に來られてから以後どうなりましたか」と問うた。

師は、「(天地をしても)覆おおえない」と言われた。

僧が尋ねた、「和尚様はお師匠様にまだお会いしなかつた時はどうでしたか」と。

師は「体からだ全体をもつてしてもいかんともしがたかつた」と言われた。

僧は、「お師匠様に相見しょうけんなされた後あとはどうなりましたか」と聞いた。

師は、「体全体で撲うつても碎けない」と言われた。

(僧は)「いったい、お師匠様におつかえできたのですかと聞いた。

師は、「ずつとお互たがい違うことはなかつた」と言われた。(僧が)「それならお師匠様におつかえできたというものです」と言うと、

師は、「みずから重要なところに注意を払つて、ぴつたりと後からついていくのだ」と言われた。

(僧が)「それならお師匠様にそむいています」と述べる  
と、

師は、「お師匠様にそむいているだけでなく、また一方  
わしにそむいているぞ」と言われた。

僧が問うた、「『百丈広録』に七仏は文殊菩薩の弟子、  
といわれていますが、文殊菩薩にはかえって師があるので  
しょうか」と尋ねた。

師は、「いまそんなに言うのも、たいそうひがみつぽく  
人に責任をなするといふものだ」と言われた。

僧が尋ねた、「太陽がまだ出ず、鶏が時を知らせない時は、  
どのようなですか」と。

師は、「(寂靜そのもので) 何の音響もない」と言われた。

僧が、「時を告げたらどうですか」と尋ねた。

師は、「みなさん、時(有限の生死)を知るのだ」と答  
えられた。

僧が、「師子は百獣の王ですのに(心性)、どうして色・

『景德伝燈録』訳文(二)(鈴木)

声・香・味・触・法の六境の塵埃に吞まれてしまうのでし  
ょうか」と問うた。

師は、「はつきりと人我は無い、とするのではない」と  
言われた。

師は投子山に三十余年住した。修行僧の往来は激しく興  
つて、教えを願うものはいつも方丈に満ちあふれていたが、  
師は自由自在の(いきいきとした)指導をした。(仏が法  
を説くのに泰然として畏るることの無い徳とされるよう  
な)無畏弁でもって、質問があると、さつと答えられ、卵  
の中の雛が孵ろうとして殻をつつくと、親鳥が殻をつつ  
ついて孵らせるように、ぴったりはまった指導や、奥深い  
言葉が頗る多い。今は省略して少しばかりここに載せた  
に過ぎない。

唐の中和の年(八八一―五)黄巢の暴動が起り、全国  
的な混乱となった。狂徒がやって来て、刀剣を手に持って  
山にのぼってきた。

暴漢が、「ここで何をしているのか」と詰問した。

『景德伝燈録』訳文(二)(鈴木)

師はそこでその場に適切に応じたことばで説法した。首領は説法を聞いて礼拝して師の言に従い、着ていた服をぬいで布施して、立ち去った。

投子禪師は後梁の乾化四年(九一四)甲戌(かのえいぬ)四月六日、少しばかり病気の症状が出た。大衆がお医者さんをお願いしようとしたところ、

師は、大衆に次のように言われた。「ものの要素が活動して集まったり散じたり(ものや肉体となったり、こわれたり死んだり)することは、きまりきったことだ。おまえたち心配するな。わしみずから保任しているからな」と言い終わると、坐禅を組んでそのまま入寂した。寿令は九十六歳であった。詔みことりして慈濟大師と諡おくりなし、塔の名は真寂といった。

本年度原稿分のゼミ参加者は、

有馬嗣朗、浅野法悦、伊藤光寿、嘉木揚凱朝、高山一法、宮下秀彦、鄭夙嬰、橋本靖夫、杉浦芳雄、今井勝子、榊原奈央子、及び研究生の花井充行氏の各氏であった。